　ネックは、ぴたりと足を止める。
　再び振り返った人垣の中から出てきたのは、若い男の隣にいた人物……茶髪三つ編みの男だ。
「君。今、エレメントの付与、と言ったかね？」
「え？　あ、ああ……」
　三つ編みの男のただならぬ気配を察して、ネックはわずかに身構え、頷きながら思う。
　なんだ、この人？
　三つ編みの男は「ふむ」と親指と人差し指で顎を挟み、
「応用魔法を見抜くのは容易いが、その言葉は早々出てこない。……それに」
　目だけ動かし、ネックの頭からつま先までを見て、
「――ただならぬ魔力を感じるな」
「……」
　その三つ編みの男の威圧感と気味の悪さに、ネックが後ずさりした時、
「教授～！　アルノルド教授～！」
　人垣の中から、今度はベレー帽の若い男が出てきた。
　三つ編みの男――アルノルドは、「なんだねジョシュア君」と言って振り返る。
「ヒートストーン売り切れちゃいました！　……って、あれ？」
　若い男――ジョシュアは、びっくりしたようにネックとアルノルドを見て、
「教授。まさか、その人と話してたんですか？」
「その通り」
「え？　自分から話しかけて？」
「そうだ」
　ジョシュアは目を丸くして、それから急に、
「え――――！」
　目一杯の身振り手振りで驚いた。
「君、私の助手にならないかね？　この私直々の勧誘だ。悪いようにはしないぞ。なぁ、優秀な助手第一号のジョシュア君」
「おっしゃる通りです！」
「は、はあ？」
「驚くのも無理はない。私ほどの天才を目の前にすれば、誰でも緊張で手が震え、感動の涙を流すのだから。そう思わないか？　ジョシュア君」
「まったくもって、その通りです！」
「は、はあ……」
　ジョシュアは、むんず、とネックの手を取り、
「アルノルド教授は凄い方なんですよ！　パイオニアで！」
「さっき聞いた」
「教授と一緒にいたら実りあることがたくさんあるんです！」
　が、ネックは冷静にジョシュアの手を退けて、
「えーっと……。勘違いしているようだけど、俺はシェンティアの人間じゃないんだ」
「おや？」
　アルノルドは片眉を上げ、とぼけるようにジョシュアに視線を流す。
「これは失礼しました。てっきり学生さんだと……」
「いや、いいけど……」
「……あ、でも、もし魔法に関心があったら、ぜひ教授の元で――」
「それもすまない。興味ねぇわ」
「そうですか……いやいや、とんだ無礼をしてしまいました。いきなり本当にすみません」
　このジョシュアとネックとのやり取りを、アルノルドは不思議そうに見つめていた。
「それじゃ」
　ネックは今度こそ踵を返し、仲間と共に広場を後にした。
「ジョシュア君」
「はい！」
「ここにはシェンティア以外の学生寮もあるのかね？」
「いや、ないと思います」